



第115図 日吉神社(橋)の飾り山(昭和4年頃) 重藤萬里氏 提供

尾弓削田村一村で神輿の供奉をつづけて来たが、その行列
々次は『福岡県史稿』に次のように記されている。

先設壇井神台 大白幣 拍方 猿田彦神四神旗〃〃中幟〃〃奉幣
先設壇井神台 大白幣 拍方 猿田彦神四神旗〃〃中幟〃〃奉幣
金幣祭官一員 御饗 神輿奏楽 輿台 祭官一員 御供饗 齋
主 騎馬 荷物 戸長二員 弁務十四員 警備廿八員

風治八幡宮の華麗な山車に刺激されて、炭鉱の最盛時には踊り山を繰り出した時期もあったが、最近では神輿の巡幸だけとなっている。

祇園祭り系統の山鉦を立てた神幸祭は、春日神社以外の諸社で見られた。すなわち、猪膝の白鳥神社では町と村からそれぞれ立てる山鉦が二基、位登八幡神社では上位登・下位登・新庄からカキ山が三基、夏吉若八幡神社では東西の祭り組からノボリ山が二基、糟の日吉神社でも同じく東西から飾り山が二基というように立てられていたが、いずれも戦中から戦後にかけて消滅している。伊加利岩亀八幡神社でも、以前は上伊加利・下伊加利・田中・平原から一基ずつ人形山が出ており、直方から人形製作者を

招いて筑前系統の美麗な山車を仕立てていたというが、これも段階的に廃絶していったのが惜まれる。各地区とも、炭鉱閉山以後は青年層の市外流出によって、山車はもちろん、神輿のかき手にすらこと欠くようになっていたが、古老を中心に行事継承の努力が続けられており、**じんこう** はなお、地域社会の生活に密接した祭礼行事としての存在意義を失っていない。

市域の神幸祭では、山鉦や神輿による神幸行列のほかに、白鳥神社・位登八幡神社等で神楽と獅子舞、風治八幡神社で獅子楽、若八幡神社と日吉神社で楽打ちの奉納がなされていたが、それらについては項を改めて述べることにしたい。

二 神 楽

神楽は、ムラ人がしつらえたまつりの座に神が現実の姿を現わして、人びととまつりの膳を食し、ともに歡をつくしたあと、夜の白むころに帰っていくという、いわゆる**祭りの饗宴**から成長分化した芸能であるといわれている。この時に現われる神は、神に仕える人間の扮したもので、神の資格で神のする**わざ**を演じる。

芸能化された神楽では、宮中御神楽が記録にのこる最古のものであるが、現在各地に伝承されているのは、石清水八幡宮その他の諸社でおこなわれていた里神楽と呼ばれる系統のものである。里神楽は、様式の上からは採物神楽・湯立神楽・獅子神楽に大別されるが、いわゆる神楽と呼ばれるのは採物と湯立である。これらは近世にわかに各地に広まったものようであるが、地方でみられるものは、系統的には伊勢流の神楽と出雲流の神楽が大部分をしめている。

田川市域では記録の上で猪膝白鳥神社、位登八幡神社、後藤寺春日神社に神楽の伝承がみられるが、おそらく他の神社でも神楽の舞われていた時期があったものと思われる。神楽に関する記録は、『福岡県史稿』村々神社例祭式の中に、位登八幡宮で四月二十九日夜に「神楽 獅子舞等ヲ奏ス」とあり、白鳥神社で三月二〇日朝に「伊勢楽ト称スル楽及ヒ獅子楽等を奉奏シ」とあるほか、春日神社の宝曆四（一七五四）年の宮帳に、「九月廿八日の晩御神楽御座候而」とみえる。このうち、白鳥神社は『福岡県史稿』に記された明治一七年の時点で、「尤モ獅子楽ハ存スルモ伊勢楽ハ今ハナシ」と廃絶のむねを記し、位登八幡神社でも、古老の口碑に痕跡をとどめぬほど早い時期（明治初期？）に消滅したもようである。白鳥神社のものが「伊勢楽」とあるだけに、伊勢流の系統で、あるいは湯立神楽があったのではないかと思われるが、その消滅が惜しまれる。

市域の神楽で現存する唯一のものが、春日神社の岩戸神楽である。戦時中に中絶していたのを、昭和四五年に保存会を結成して復興させたもので、現在は五月一七日の神幸祭で神輿の還御したあとと、一〇月末日の「神待ち」（最近では休日を選んで一月三日）の日に奉納している。古くは、くにもちまつり、の前夜にあたる陰曆九月二十九日の夜に奉納されていたというが、創始の時期は不明で、断片的な記録にその存在をたどり得るのみである。副題に「春日之宮寄進帳」とあって、元龜二（一五七二）年から文化一三（一八一六）年までの春日大明神に対する寄進の事績を記した「豊前国田川郡弓削田庄春日大明神宮帳一篇」から、神楽についての記載を拾ってみると次のとおりである。

一慶安三庚 面七面 奉彩色也 西弓削田村氏子中
庄屋 善左衛門
(此面享保十年子冬盗人取ル)

一天和三庚 御神楽殿奉建立 折願師 重藤式部重次
願主 西弓削田村惣氏子
御国主小笠原遠江守公

御武運長久如意御安全所敬白

右之意趣へ去ル延宝三卯世上大疫悩人民衆人奉幾回為憶于時折願師於神前当所安穩如意満足旨抽丹精者村中静謐民安全 普神力加護 依茲益敬神徳 糾中絶旧例 件奉建立一字 早

奉願成就 明和七庚 寛政秋九月廿二日
一御神楽(面七表 赤熊四頭)

後藤寺町 施主 長尾九良兵衛
宮尾 治左右衛門

上弓削田 藤五郎
下弓削田 助七
河原弓削田 嘉平
見立村方頭 藤藏

右 折願主 藤原将義謹書
神主 後藤寺町

願主 長尾金兵衛
神主 重藤因幡守
筑前上山田邑 塗師 清白軒太三次

奉寄進 一兒屋彌面一ツ彩色

于時安永八巳亥年十二月廿一日

春日社祭礼時 享保年中
一 永代本神楽料 畠六畝

畠四畝十七歩
安永元年暮る

一米四斗永代神楽料

于時安永九庚子年ヨリ

寛政三辛亥年秋九月祭日
一 奉寄進 岩戸面手力雄命

一 永代本神楽御供米 式部
持興
下田下々田 四谷ノ尻ニタ切證文弥
同人

一 永代神楽田一ヶ所

右柳原

一 御神楽田一ヶ所

右樋口田式名

一 永代神楽米八計

上弓削田 佐竹藤三郎
下弓削田 津川万太郎
下弓削田 山本吉左衛門
川原弓削田 原田利八
人形町五丁目土梅流藤屋喜右衛門手下
塗師 新兵衛
後藤寺 吉右衛門
中米田 伊藤久五郎
上弓削田 福田治兵衛
下西 山竹藤五郎
同人 同姓吉左衛門
後藤寺 井上多右衛門
下弓削田 津川四郎右衛門
川原弓削田村 徳野善五郎

文化十二年乙亥長月日
一 御神楽田一ヶ所

右新助原田式名

田原村住荒巻姓
大□庄 金田儀六永寛

すなわち、天和三（一六八三）年に神楽殿を建立して「中絶の旧例を糺し」たとあり、それ以前の慶安三（一六五〇）年に神楽面七面の彩色が記されているところをみると、その初源はさらに遡るものと思われる。岩戸神楽とあるので、系統としては以前から出雲流の神楽が伝承されていたものとみられ、現在でもそれを継承している。昭和八年に旧来の口伝を整理してまとめた『御神楽之乘』（津川鹿信 津川秀雄集録）によれば、春日神社に伝承されていた岩戸神楽三三番は次のとおりの演目である。

- ①、清鼓之舞
- 二、五行之舞（七神楽）
 - ① 四神之舞 ② 風神之舞 ③ 土神之舞 ④ 花神之舞 ⑤ 御敷斗之舞 ⑥ 方位鎮之舞 ⑦ 鎮之舞
- 三、出雲奉還之舞（八神楽）
 - ⑧ 中臣之舞 ⑨ 香取之舞 ⑩ 鹿島勇武之舞 11 大己貴之舞 ⑫ 漁獵之舞 ⑬ 鳥船使神之舞 14 千引之舞 15 献上之舞（大平之舞）
- 四、天孫降臨之舞（六神楽）
 - 16 手草之舞 ⑭ 弓取之舞 ⑮ 先駆之舞 ⑯ 言問之舞 ⑰ 猿田之舞 21 猿女之舞
- 五、天盤窟之舞（十二神楽）
 - ⑱ 見神之舞 23 神議之舞 24 献策之舞 25 大占之舞 26 大幣之舞 27 禰之舞 28 釧之舞 29 神饌之舞 30 文布之舞 31 番登之舞 32 尻久米之舞 ⑳ 戸隔之舞



第116図 春日神社の神楽（上、四神の舞下、両鬼の舞）

このうち現在演じられているのは○印を付した演目であるが、出演者の配役の関係で順序はかならずしも古格のとおりではない。三三番の全部を演ずれば、おそらく夜を徹してのこととなるが、現在では部分的な組み合わせを施して、一二の演目にまとめ、上演時間を約三時間としている。舞台は春日神社拜殿に四本笹をたてて注連を引き、周囲に清奠座を敷いた中で舞われる。囃子は笛一〜二人、太鼓一人、銅拍子一人。

じまり、五行の舞（七神楽）は全部が舞われるが、出雲奉還之舞（八神楽）以下は、漁獵・鳥船使神・弓取・猿田彦・鬼神等の舞を抄出して、最後を岩戸隠之舞で結んでいる。

1 清祓之舞 一人舞。狩衣・白袴・立烏帽子。三室に饌米を持って登場。祓詞を奏上して御祓の舞。
 2 四神之舞 四人舞。句句廻馳神（東方木神）、迦具土神（南北火神）、金山毘古神（西方金神）、彌都波能売神（北方水神）。いずれも狩衣・白袴・長烏帽子。狩衣の色は、木神―青、火神―赤、金神―白、水神―黒。採物は四神ともに鈴・扇

（太刀・花菓子は今はなし）。東西南北の神々が順次登場して、東方より一神一歌を奏しながら舞う。（歌詞略）

3 風神土神之舞（風神之舞・土神之舞を併せたもの） 二人舞。風神（綴長戸辺神）―狩衣・白袴・烏帽子、採物は幣二本。土神（壇安神）―黄色の狩衣、縞目の裁着袴、毛頭に赤面、しかん杖（先に幣）一本を持つ。風神・土神の掛合いで舞う。（掛合詞略）

4 一本太刀之舞（方位鎮之舞） 四人舞。東西南北の諸神。白千早、白袴、毛頭（二神は白、二神は黒）。それぞれに太刀を採り、勇壮な舞を舞う。

5 両太刀之舞（鎮之舞） 一人舞。中央の神（土神）が一本太刀之舞と同様の装束（白の毛頭）に太刀二本、曲技を交えつつ勇壮に舞う。

6 両鬼之舞 二人舞。錦の狩衣に袖無し着用。裁着袴、白・赤の毛頭に双方とも鬼面、採物はしかん杖。天忍日命、天久米命両神の掛合いを演じたもの。勇壮な舞。

7 花神之舞 四人舞。はじめの五行之舞にもどり、東西南北の諸神が、烏帽子・狩衣・白袴に扇を携へ、散華をしながら優雅に舞う。

8 御敷斗之舞 一人舞。同じく五行之舞の一つ。風神が白狩衣・烏帽子・白袴で手に御敷を持って舞う。鎮の舞の一つ。

9 弓取之舞 二人舞。烏帽子、千早に白袴、扇と弓を持って優雅に舞う。

10 先軀之舞（漁獵之舞、鳥船使神之舞を併せたもの） 二人舞。事代主神が翁面で登場。狩衣・白袴に扇子と釣竿。釣竿でユーモラスに釣の所作を演じる。

11 猿田彦之舞 二人舞。はじめに天鈿女命が千早に緋袴、女面と冠をつけ、扇と鈴の採物で言問の舞を舞う。次に猿田彦神が登場。毛頭に鼻高面、狩衣に襟をかけ裁着袴のいでたち、手に矛を持つ。鈿女命と猿田彦神のユーモラスな掛合いと舞。

12 岩戸隠之舞 一人舞。手力男命が千早（大袖）に裁着袴の扮装で面をかぶり、幣を持って登場。しばし勇壮な舞を展開し、たあと、岩戸を開く。

現在、伝承されているこの一二演目だけを見ても、春日神社の神楽は、採物を主とする出雲流で、湯立てこそなけれ赤幡神楽（築上郡築城町）・横代神楽（北九州市小倉区）などとともに、豊前系岩戸神楽の一派をなすものとして、貴重な伝承価値を持つということが出来る。

三 獅子舞と桑打ち

獅子舞

獅子舞も神楽の一種で、獅子神楽と呼ばれる。赤または黒の大きな獅子頭にホロ幕をつけ、その幕のうちに一人または二人の舞人が入って勇壮な舞を見せる。有名なのは伊勢の御師たちによってひろめられた代神楽で、神宮代参の御祈禱と称して神楽師たちが家々を巡回し、門口で鈴・御幣・剣などの採物を持ち替えて悪魔祓いの所作を演じていた。また、東北地方には権現舞と称する獅子神楽があって、山伏によって伝えられたといい、獅子が各戸を訪問しては権現の威力を示す意味の舞を演じてみせた。

田川地方に伝承されていた獅子舞がどの系統に属するものかはさだかでないが、その伝承形態からすると、伊加利・夏吉・糟等で、旧七月七日を中心におこなわれていた。獅子廻りと、風治八幡神社その他で神幸祭の折に舞われていた獅子舞とに分けられる。

獅子廻はその起源・沿革等が伝わっていないが、「歳時習俗」の章で七月七日の行事として述べたとおり、伊加利・夏吉・糟の三地区とも、ほぼ同形のものが戦後もしばらくは伝承されていた。おそらくは彦山川流域一帯でお

こなわれていた暑中の疫払い行事であったと思われる。五色の旗・御幣・金幣・水王火王の面・太鼓・囃子（チン拍子）などで行列を作って、獅子が村内を巡回し、軒別に獅子を舞わせてお祓いをしていたというから、芸能というよりも魔祓いを中心とした信仰行事ということになる。記録の上では、春日神社の信仰圏であった弓削田一円にもそれがみられる。すなわち宝曆四（一七五四）年「田河郡宮尾弓削田村宮帳」に、

二月初卯日西弓削田浦八山潮井ヲ備五氏子社参仕御宮籠仕諸病為退除獅子舞御座候并ニ七月七日ニ八垣廻し御神幸ヲ依在庭草杯掃除仕産子中社参致シ御宮籠仕流行病難為退除村中へ獅子舞御座候

とあり、やや下って天保一五（一八四四）年の「田川郡村々諸祭礼式書上帳」になると、

- ・西弓削田村 二月初卯日村中安全為御祈禱獅子廻執行仕候
- ・河原弓削田村 六月十四十五日祭礼夏中諸病退除牛馬安全獅子廻仕
- ・見立村 六月十八十九日祭礼（中略）十九日獅子廻御祈禱執行仕候
- ・後藤寺町 六月十六十七日祭礼末社十二社権現ニ産神社勧助仕町中安全諸病退除為御祈禱獅子廻町中休日笹山車巻本仕立申候

と、「村中安全、夏中諸病退除、牛馬安全」を御祈禱して獅子廻をしているのがはっきりと現われている。あるいは祇園信仰の流入によってこの地方の夏祭りが全盛を極めた近世中期、伊勢の御師あたりによる代神楽系統の門祓い獅子が伝えられていたということではなからうか。すでに各地域ともその伝承が消滅しているため、舞口その他の記録化ができないことが惜しまれる。

神幸祭に付随した獅子舞は、記録の上では伊田風治八幡神社、後藤寺春日神社、位登八幡神社、猪膝白鳥神社等

田川市史 民俗篇

昭和54年2月25日 印刷

昭和54年3月1日 発行

編集 田川市史編纂委員会

発行 田川市役所

印刷 株式会社 ぎょうせい

本社 東京都中央区創元7の4の12

営業所 東京都新宿区西五軒町52

九州支社 福岡市中央区春吉3の24の12

電話 092 (751) 2865 代表

福岡県文化会館
〒3,000